

仏教の平和思想(1)

——「縁起」の視座から——

(一) 非暴力と「自己規律の力」

池田SGI会長の「非暴力に関する一考察」という論文のなかに、次のような一節がある。「非暴力の原理をもって、暴力の原理を断罪していくことは、パーソナルな次元では必須の要事である。しかし、それだけで非暴力社会が実現すると考えるのは、あまりにナイーブにすぎるだろう。人間社会に必ず随伴してくるインスティテューショナル(制度的)な次元にまでふ延させ、貫徹させることができれば、非暴力の運動の組織化は不可能であって、更にいえば、暴力と非暴力との類縁関係にある『政治の世界』と『宗教の世界』、『国家』と『人間』、『力』と『精神』といった人類数千年の歴史を通じて反目し、背反しつづけてきた二つの領域の架橋作業もまた、不可能になってしまうにちがいない。」

SGI会長は、M・ガンジの苦闘とその輝ける足跡を照明しながら、彼が、二つの背反しつづける領域の架橋作業を一時も手放していない事実に着目している。それは、ガンジが、常に激しい政治闘争の場を離れていない生涯そのものが、何よりも雄弁に物語っているという。政治という暴力機構のうずまく場にあつて、しかも政治の論理を

川田 洋一

こえる視座を保持する。だからといって、政治の現場から遊離するのではなく、あくまで、民衆闘争のただ中にとどまりつづける——その苦闘の中に、非暴力の生き方が貫かれ、人間錬磨、自己実現と他者救済への道が開拓されていくのである。二つの領域によってひきさかれる暴力と非暴力、慈愛と残酷、信頼と不信の深淵に架橋作業をなしゆく人間の本然的な力を、SGI会長は、「自己規律の力」として凝集させてくる。

「けだし、この『自己規律の力』こそ、ともすれば暴力が非暴力かという二者択一、果てしなき、不毛の二律背反に陥りがちなこの問題を弁証法的に止揚し、非暴力を恒久平和への時代精神にまで内実化させゆくキー・ワードとはいえないか。」⁽²⁾

シセラ・ボクは、平和戦略として戦略言語とともに道徳言語の必要性を説き、二つの併用を主張している。それは、ソ連、東欧の民主化の底流に、非暴力の抵抗を見通し、期待をよせているからである。

道徳的品位や節操ある行為を強調する者として、トルストイ、M・ガンジー、マーチン・ルーサー・キング等をあが、さらにカントの「永遠の平和のために」を考察の土台として、次の四つの「道徳的抑制」を提示している⁽³⁾

即ち「暴力」「詭計（べてん、だまし）」「裏切り」「過剰な機密」に対する四つの道徳的抑制である。これらはそれぞれ「非暴力」「正直」「信頼」「情報公開」という積極的な項目に対比されている。しかも、この四つの道徳的抑制は互いに深く結びついている故に、すべてをともに実現していかなければならないと主張している。これらの徳目は、最も現実に即したものであり、戦争そのものの脅威をなくする基礎をなすものと位置づけている。仏教においては、これらの徳目は、戒律のなかに見出せる。「非暴力」は「不殺生戒」として、「信頼」は「信」の善心として、「正直」は「不妄語戒」として組み込まれていると思われる。また「公開性」は、サンガにおける合議の作法としての「コンマ」に貫かれている。

仏教では、これらの「道徳的抑制」を可能にする根本の精神エネルギーとして、智慧に輝く慈悲心をあげてくる。

M・ガンジーも「非暴力とは無限の愛のことであり、無限の愛とはまた、受難に耐える無限の能力のことである」と述べている。⁽⁴⁾

M・ガンジーは、無限の愛の基底を「真理」（サティヤ）に求めて、そこから「非暴力」をはじめとする道徳的品目を展開してくる。例えば、一九三〇年、イエラヴァダー刑務所からサーバルマティーのアーシラムの門人に送った「誓い」のなかには、次のような徳目がある。

「真理」「非暴力」「プラフマチャリア」「無所有」「不盗」「真勇」等である。⁽⁵⁾ 仏教の戒においては「プラフマチャリア」は「不邪淫戒」として、「不盗」は「不偷盜戒」に相当するであろう。M・ガンジーは、これらの徳目を実践しながら、政治、社会の場へと、非暴力、非協力、抵抗の運動を展開していったのである。

シセラ・ボクのいう「道徳的抑制」、仏教の戒、ガンジーの「誓いの徳目」がさし示すのは、具体的な政治の場、現実社会での「自己規律」「自己制御」の実践のあり方であろう。

そして、人間としての生き様のなかに、「自己規律」という精神の力、自己の内面を洞察する透徹した智慧の眼と、生命内外にあれ狂う煩惱の嵐に挑戦しゆく勇気を養うことこそ、宗教の社会的使命であると思われる。仏教は、この人類への使命を、「縁起の理法」にのっとって具現化しようとするのである。

（二）社会悪への因縁

原始仏教における縁起説の根本的定義としてよく使用されるのは次のような句である。

「是あれば彼あり 是生ずれば彼生ず
是なければ彼なく 是滅すれば彼滅す。」

この句は、いかなる存在も、独立自存するということではなく、多くの条件や関係、即ち相依相資の関係性の上にの

み成立しているという意味である。ここには、存在論的関連性と生成論的関連性が示されている。存在と非存在、並びに生と滅の関係性である。生滅の視点には、空間的関連性とともに時間的関連が含まれている。

一切の存在、森羅万象が、互いに「因」となり「縁」となって支えあい、関連しあっているものであり、独存の実体などはないのである。端的にいえば、相依相資しあう「関係性」のなかに、万物の展開、流転をみようとするのである。この時間、空間にわたる総合的、包括的ダイナミズムそのものが「縁起」であるといえよう。

さて、このような「縁起」の理法から、二十一世紀を目前にした地球人類がおりなす具体的な政治、社会、文化等のあり方にどのような照明があてられるであろうか。

そこで、ここでは、平和思想との関連から、社会悪の根拠をなすと思われる具体的な縁起の連鎖を説く経典をとりあげたいと思う。第一に、「大縁方便經」(第九)には、次のような縁起が説かれる。阿難と問答する釈尊の言葉である。「阿難、我れ此縁を以て知る。愛は受に由り受に由りて愛あり。我が説く所の義、此に在り。阿難、当に知るべし、愛に因りて求有り、求に因りて利あり、利に因りて用あり、用に因りて欲あり、欲に因りて著あり、著に因りて嫉あり、嫉に因りて守あり、守に因りて護あり。阿難、護あるに因りての故に刀杖諍訟有りて無数の悪を作る。」

ここに愛(欲愛)―求―利―用―欲―著―嫉―守―護―刀杖諍訟、無数の悪という縁起の連鎖が示されている。経典ではこれ等の縁起の相依相关性を順逆二観に説き、しかも生滅の二観をもさし示している。

社会悪、刀杖(暴力性)の因縁を示し、その連鎖の根拠に愛(欲愛)を求めるものである。人間の欲愛という煩惱を基点にして、求―利……と連鎖して暴力、争いにまで至る(順観)。今度は、逆次に欲愛を消滅させることによって、求―利……等と消滅して、非暴力を可能にする(逆観)ことを示す縁起である。

第二に、南伝大藏經のなかの、「鬪諍經」には、「想」の心所に社会悪の基点を求める縁起が示されている。

「争鬪と諍論と悲と愁と及び慍と、慢と過慢と及び両舌とは、これ何処より発生せしや。……愛より発生せり。……

愛は世間にて何を因縁とするや。……愛は世間にて欲を因縁とす。……障碍なるものは想を因縁とすればなり。」

ここには、このようにして「想」を基点とする連鎖がえがかれていく。先の経典と同じように、「想↓争鬪の方向に並べかえれば、次のようになる。

想―障碍(渴愛または愚見による)ある名色―触―受(可意と不可意)

① 忿・妄語・疑惑

② 欲―愛―争鬪・諍論・悲愁・慍・慢・過慢・両舌

ここに「想」に因りて渴愛や愚見に染まった障碍ある名色が起き、その連鎖によって、結局、争鬪や諍論等がひき起こされるというのであるから、この「想」とは、特定のイデオロギーやまた、宗教、思想等に基づくイメージへの執着をさすと思われる。つまり、この縁起では、争鬪(暴力性)の基盤に、「想」という人間の映像化・概念化の作用を見出すのである。

「成唯識論」では、「欲愛」(貪欲)と「想」の心作用について、次のように記されている。「貪」については、「有と有具とに於て染着するを性と為し、能く無貪を障えて苦を生ずるを業と為す」とある。貪は、自己と自分の境涯に執着することである。「貪」は、次の「想」に対して、本能的、衝動的次元の働きといえよう。この「貪」に拮抗する心作用として「無貪」がとりあげられている。仏教で、貪―無貪のように種々の煩惱に対して、これに拮抗する善の心作用が分析されていることは、きわめて重要であろう。

「想」については、「境に於て像を取るを性と為し、種々の名言を施設するを業と為す」とある。つまり、対象をとらえ、自分のほうから一つの形象、心象をつくりあげていくものである。さらに、もう一つ、「想」には概念化の働きがある。自分でえがいた映像、心象を整理分類する。そして「名言を施設」して、対象を理解したつもりになるというのである。

これが、人間の認識のあり方であり、この限界性から、悪見や煩惱に染まった心身の働き（名色）が生じ、社会悪の基盤になるとの指摘である。例えば、あるイデオロギーや主義主張によって、相対立する人間や集団を敵とし、そこに悪のイメージを付加することによって、暴力を使つての抹殺を試みる思考法は、想—障碍ある名色——と連鎖する縁起の具体例である。総じて、二元論的思考法としての「想」そのものが、その限界性の上から、煩惱や悪見に染まった連鎖をひきおこす危険性をはらんでいるといえよう。

現今、共産主義というイデオロギーの崩壊を来し、また、これらの特定のイデオロギーに支配される時代は終わったといわれているように、人類はようやく「想」から起きる争闘への連鎖を抜け出ようとしているのであろうか。しかし、未だ、民族、文化や宗教によつての紛争が頻発している状況では、「社会悪」への連鎖をすべて断ち切つたとはいえないようである。特定の人種や文化、宗教への「偏見」や、そこから起こる本態的次元での「欲愛」などが、人々の心奥からぬぐい去れていないことも事実である。

池田SGI会長は、先の論文のなかで、「私は、ここに『自己規制の力』の際立って自発的・内発的な発現へのうながしがあると思つてゐる。なぜなら、対立する相手の中にも、『悪』と同時に、『善』を認め、自らも『善』にも『悪』にもなりうる存在であることを自覚することのできる自己客観化能力—相手を一方的に『悪』とし、自分を独善的に『善』とする自己絶対化とは対極にあるこの能力は、言葉の真の意味での精神の緊張と充溢を必要とするからだ⁽¹⁰⁾と述べている。相手の中の『悪』とは、欲愛（貪欲）等の煩惱であり、また『善』とは、貪欲等に拮抗しうる善の心作用をさしている。他者の生命のなかにも、無貪、無害、無瞋等の『善』を見出し、また同時に、自己の生命に内在する害（暴力性）、瞋恚、貪欲等の煩惱を洞察する智慧の眼によつて、『想』の限界性をこえ、正見の名色への連鎖をもたらすといえよう。『自己規律』の力とは、自己と他者の生命に内在する『善』と『悪』の洞察の上から、相依相関の「縁起の理法」にのつとつて、良く、『悪』を『善』へと転換しゆく勇氣ある不断の挑戦をなす魂、精神の力である。

このように輝ける精神の力、魂の力こそ、国境や民族、人種の壁をこえ、平和共存をめざす「人類意識」、さらには生きとし生けるものとの共存をなしゆく「地球生命意識」を熟成しゆく原動力となりうるのではなからうか。恒久平和構築のために、政治、経済、文化、教育の次元とともに、それをなしゆく人間の変革、「自律」の人間の輩出が、宗教に課せられている。

（三）生き方としての菩薩道

仏教は、いかにして、「自己規律の力」に充満した人間群を輩出しうるのであろうか。「縁起の理法」の人間生命への具現化としての菩薩道のなかに、非暴力、慈悲に輝く魂を見出すのであるが、現代社会における菩薩の生き方とはいかなるものであろうか——そこで、「法華経」に説かれる「不軽菩薩」の非暴力による闘いの軌跡をたどつてみたい。「法華経常不軽菩薩品」（第二十）には、過去に威音王如来が滅度した後に、多くの増上慢の比丘が充満している時、常不軽と名づける菩薩が出現したと記されている。この名の由来について、「若しは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を皆悉く礼拝讃歎して、是の言を作さく、我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べしと。而も是の比丘、専らに經典を誦誦せずして但礼拝を行す⁽¹¹⁾」とある。

ここに記されているように、不軽とは四衆に輕侮されても、決して万人を輕んじなかつたことを示す名前であるが、この「輕んじない」という断固たる決意と行動は、まさしく「自己規律の力」の発現である。では、「自律」はいかにして可能になったのか——あらゆる人間生命には、仏性が具備されており、どのような人間であつても、将来、必ず、菩薩道を行じて、この仏性を開顯しゆく尊い存在であることの洞察によるのである。經典には、「瞋恚を生じ、心不浄なる者有り、惡口罵詈⁽¹²⁾」、「衆人、或は杖木、瓦石を以つて、之を打擲⁽¹³⁾」とある。

言論の暴力、さらに物理的暴力にまで訴えたことを示している。それでも、不軽菩薩は、万人の仏性を礼拝しつづ

け、菩薩としての生き方を示したのである。日蓮大聖人は、この菩薩の境地を「不輕礼拝の行は皆当作仏と教うる故に慈悲なり」⁽¹⁴⁾。「忍辱地に住して礼拝の行を立つるなり」⁽¹⁵⁾と記している。さて、不輕菩薩は、臨終に際して、法華經の偈を聞いて、受持し、「六根清淨」の大境界を得たという。經典には「是の比丘終らんと欲する時に臨んで、虚空の中に於いて、具さに威音王仏の、先に説きたもう所の法華經の二十千万億の偈を聞いて、悉く能く受持して、即ち上の如き眼根清淨、耳、鼻、舌、身、意根清淨を得たり」⁽¹⁶⁾とある。そして、さらに、壽命をのばして、法華經を説き、それまで迫害してきた四衆を帰依せしめたと記されている。不輕の行動に触発された四衆も、自己の煩惱を直視し、よく、これを善心に転換しえたのである。瞋恚、貪欲が、慈愛、無貪へと変われば、縁起の理法にのっとって連鎖しゆき、先述したように、社会悪たる争諍という暴力性の消滅にまで及んでいくのである。

不輕菩薩の示す仏教者の生き方は、直接的暴力、並びに構造的、文化的暴力の荒れ狂う「領域」のただ中であつても、瞋恚等の煩惱に汚された人間生命の内奥に光輝く仏性を見出している。そして、その仏性を開顯させるために、瞋恚と暴力性に汚濁した現実社会の場で、あくまで非暴力の手段によって対決したことである。つまり、「政治・社会」と「清淨な魂」の二つの「領域」の架橋作業を死をとしても手離さなかつたのである。その生命の中に慈悲心が横溢し、忍辱地に住していたが故に、生と死の境界において、「六根清淨」という、いわば宇宙根源の法、真理を洞察し、体得しうる境界をあらわしえたといえるであらう。

M・ガンジーは、「サティヤ(真理)」という語は、存在することを意味する「サット」という言葉に由来する(中略)。この真理への献身が、わたしたちの存在を意義あらしめる唯一のよりどころである。」「アヒンサー(非暴力)」⁽¹⁷⁾なくして真理を求めることも、発見することも不可能なことが明らかになったと思う」⁽¹⁷⁾とのべている。M・ガンジーも、真理の「声」に耳を傾けている。

「私にとって、神の声は私自身の存在よりも実在している。神の声は決して私を見捨てないし、実際、ほかの誰をも

見捨てない。望むものは誰れでも神の声を聞くことができる。それは誰の心の中にも存在している」⁽¹⁸⁾

彼にとって、真理は神である。その真理の「声」、内なる「声」を聞きながら、自己淨化、煩惱の転回を志し、その闘いが、非暴力等の誓いの実践となって表出したのである。不輕菩薩が、臨終において耳を傾けた法華經の「声」は、仏性の顕在化であらう。万人内在の仏性は、同時に大宇宙に遍満する根源の当体である。仏の生命は、すべての人々の「内なるコスモス」を輝かすとともに、大自然、宇宙という「外なるコスモス」をも貫く光輝く法(ダルマ)である。

菩薩は、あくまで「非暴力的手段」によって、自他の仏性という宇宙根源の真理の開顯をめざすのである。慈悲、非暴力、信頼、布施行等の方法によってのみ、仏性は顕在化するのであり、煩惱に汚染化された手法(暴力性、ざまん等)によっては、たとえ同じところに目標をおいても、不可能なのである。つまり、手段が慈悲におおわれていてはじめて、その達成すべき目標にも慈悲の光明が輝くのである。非暴力的方法は、結局のところ、他者の生命の尊厳性をあらわにしてくるのであり、そのことが同時に、自己の根源なるものの把握、顕在化をめざす人間の本来的な生き方となるのである。つまり、現実社会における「自己規律の力」の基盤を仏性に置くことにより、自他の善心を開示し、煩惱を良く制御しうるのである。ここに、M・ガンジーの示す「サティヤグラハ(真理把握)」と「アヒンサー(非暴力)」との関係性との見事なまでの類似性に着目せざるをえないのである。

SGI運動の精神も、不輕菩薩等によって示された大乘仏教の菩薩道を貫く魂と共鳴しゆくものである。

(四) 仏教の「縁起」的世界観

第二次世界大戦後の世界を主導してきた東西の冷戦体制が終末をむかえ、新たな世界秩序構築への模索がはじまっている。東欧の変革、ベルリンの壁の崩壊、ポスト湾岸戦争から、EC統合、ソ連邦の急激な再編成等、まさに、世

界は、歴史を画する変革期をむかえている。国際社会は、ポスト覇権のシステムを求めて、米、日、独の三極体制、多極体制、地域ブロック化、相互依存体制等のさまざまな未来が語られはじめている。そのなかにおいて、確実に、さまざまな次元での「グローバルイズム」が進行している。世界経済は、自由主義のさらなる展開のもとに「ボーダレス・エコノミー」的に転換しつつあり、そこで行われる政治は「ボーダレス・ポリティクス」となる。現代の情報技術の革新は、多国籍企業のみならず、地方自治体を舞台にした姉妹都市交流や非核宣言運動が活発化し、スモール・グループ・ネットワークを形成していつている。国連NGOはさまざまな分野で活躍し、反核や環境、難民救済等に関する市民運動の交流も盛んである。又、大学や研究機関、文化団体のネットワークづくりも進んでいる。グローバル化のなかで、逆に、利害の対立、文化、宗教、人種の相違による摩擦や紛争が尖鋭化していることも見逃せない。また、核、人権、環境、南北格差、麻薬汚染等の「地球的問題群」が文字通り、国境をこえて、グローバルに噴出している。

このような時代の潮流を考えれば、いかなる世界新秩序へと向かうにしても、ともかく、多種、多様なレベルでの相互依存性を尊重しなければならず、その調整とダイナミックな調和の上に秩序を形成する方向へと向かわざるをえないであろう。

ここに、各国家の連帯、役割分担を通じての協調、政策と利害の連続的微調整等による秩序形成への時代というイメージがうかがいがってくるのである。それは、「パックス・コンソルティス」(コンソーシアムによる国際秩序)とも呼ぶうるであろう。⁽¹⁹⁾

この連帯と協調による秩序の形成にあたって、仏教の「縁起」的世界観が、哲学的基盤を提供しうるように思われる。

大乘仏教における法界縁起、重々無尽縁起では、この世界の一切の現象は仏性から現われ、幾重にも無限に関係し

あつていているという。その喩えとして、「華嚴經」に示される「帝釈天の網」があげられる。⁽²⁰⁾

帝釈天(インドラ)の天宮には、その結び目の一つ一つに宝石がとりつけられた宝網がかかっているという。この網目にとりつけられた一つ一つの宝石は互いにすべての宝石を映し出している。このように、一つの現象が他のすべての現象に反映し、他のすべての現象がただ一つの現象に反映しあうのである。「一」と「一切」との相即である。

ここに仏教の「縁起の理法」にのっとった「世界イメージ」がえがかれてくる。例えば、各宝石を主権国家の象徴とすれば、あらゆる国家が、政治、経済、文化、教育等の各分野の人間の営為において相資相依しつつ、関連するイメージが浮かびあがる。国家権力の最大の悪といえ、他国を侵略する軍事力である。この軍事力のレベルをさげる(軍縮)、あるいは地域紛争を管理するという作業にあたって、前提となるものが、国家間の相互依存性の十分な認識であり、その上に立つて、協調、調整が可能になってくるのである。

また、今度は、各宝石を、経済、科学、文化等の象徴ととらえれば、そこに示されるイメージは、これらの領域が相互浸透しゆくものである。

例えば、文化と産業、情報科学の融合から、新たな「情報経済」「文化産業」が生まれ出ることになる。

さらに、経済・文化交流等が政治的安定の土壌となり、ここに、新たな人類文化が生まれ、世界新秩序を支えることにもなる。まさに、多様性と普遍性、全体性と個性性を相即させつつ、創造的地球文明を構築しうる「イメージ」といいうるであろう。しかも、その相依性の連鎖には、瞋恚や不信、貪欲ではなく、慈愛や信頼、無貪の善心が交いあい、非暴力、不戦の共存システムを創造しゆくダイナミックな躍動のプロセスがえがきあげられている。信頼、非暴力等の「精神性」に支えられた文化、政治、経済等の分野における相依相関性の認識と体得は、人間の意識を拡大し、深化させ、次第に地球共同体、人類共同体への意識、つまり「地球人類意識」を熟成していくであろう。さらに、生きとし生けるものを慈愛する「地球生命意識」にまで拡大されるのである。

ところで、以上のような「縁起」的世界観における「中核」となるのが、グローバルな課題に対する人類の調整機関としての「国連」である。「国連」は、いわば、重々無尽なる相互依存性の「焦点」であり「調整の場」といえよう。新世界秩序の構築において「国連」の役割は、一段と重要なものとなるであろう。

本年（一九九一年）の「二六提言」大いなる人間世紀の夜明け⁽²⁾のなかで、SGI会長は、国連の改革、強化を主張し、国連を中心とした安全保障、危機管理、世界秩序づくりへの数々の提言を行っている。

例えば、ノーマン・カズンズ氏の意見をとりあげ、「連邦制」システムから学ぶべきこととして、絶対主権国家というシステムをなくして、連邦の管轄権と国家の管轄権を分離、つまり、連邦のなかで共有される主権と国民国家によって保持される主権を分離するという構想を高く評価している。

また、SGI会長は、NGOの役割の強化を訴え、今後、NGOの主張をより国連の議論に直接反映させていくシステムを考えるようにと望んでいる。

SGIはこれまでも、人類愛に根ざすNGOの活動として、国連と協力して「核の脅威展」を行い、ひきつづき昨年より環境、人権等の地球的問題群をとり入れた「戦争と平和展」を世界各地で開催している。展示に接した人々の生命の内奥より、非暴力、慈愛の力、――暴力性と戦う「自己規律の力」を開発する助縁となることを期待して、地球上のできる限り多くの地の巡回をめざしている。

さらに長期的には、「縁起の理法」にのっとった「自律」の人間、「自律」の社会を創造するために、創価大学、東洋哲学研究所、民音、富士美術館等による学問、芸術、文化の交流を行い、また、世界に活躍するSGIメンバーの平和・非暴力への教育にも力を入れている。これは、SGIの教育部のメンバーが主体となっておし進めているものであるが、まず、「世界の教科書展」「世界の少年少女絵画展」「世界のおもちゃと教育展」等を通じて、ユネスコとも協力して、世界の子供達の相互理解、相互啓発を目指している。次に、「教育フォーラム」「人間教育実践報告大会」

「教育プラザ」等を開催し、教師が子供との関わりのなかで体験した軌跡を語り合い、相互に啓発しあっている。さらに、教師と一般の人々との関連の場として、「教育相談室」をもうけ、具体的に非行、暴力（学内、家庭内）等に悩む親子のカウンセリングに努めている。これには、ケースによっては、医師が関与することもある。

SGI総体の試みとしては、青年部、婦人部等による「仏教哲学大学校」を開催し、仏教を基調にして、各分野の専門家を囲んでの教育、啓発に努めている。また、SGI会長は、多くの世界の識者と対話し、相互理解に努めているが、スピーチのなかでは、この対話の内容を紹介している。

SGI運動の基軸の一つに、座談会がある。あらゆる職業、年齢、人種によって、仏教の法理を基調にして、体験、研究発表等を行い、各人がそれぞれの現実社会の場で、人類の平和、文化に貢献しゆく人間としての智慧と勇気のあり方を理解しあっている。こうして、各メンバーが、「自律」の心、非暴力、慈悲に生きる菩薩としての勇気を発現し、地球人類意識、生命意識を体得しながら、仏教の平和思想をこの惑星上に現出するための不断の「精神の戦い」をくりひろげているSGIの運動は、仏教の「縁起的」世界観の、二十一世紀を間近にむかえた地球人類の「現実世界」という「領域」への具現化である。

その具体的な活動のなかに、仏性を開発しつつ、自己実現を可能にしゆく個の営みと、その「自己規律の力」の外界への働きかけとしての利他の行為、即ち、人類総体の平和と繁栄をめざす菩薩道が相即してくる。現実には、躍動し、人類のために奉仕し、貢献するという仏教本来のあり方の一つが、ここに表出していると思われるのである。

注

(1) 聖教新聞、一九九〇年九月二〇日付

(2)

- (3) シセラ・ボク著／大沢正道訳『戦争と平和』（法政大学出版局、一九九〇年）
- (4) クリシュナ・クリバラニ編、古賀勝郎訳『抵抗するな・屈伏するな《ガンジー語録》』（朝日新聞社、一九七五年）
- (5) 竹内啓二他訳『マハトマ・ガンディー、私にとつての宗教』（新評論、一九九一年）
- (6) 大正大蔵経卷一、長阿含経卷十、大経方便経六〇頁下。
- (7) 南伝大蔵経卷二十四、闍諍経三四頁～三三九頁。
- (8) 大正大蔵経卷三十一、成唯識論卷六、三一頁中。
- (9) 大正大蔵経卷三十一、成唯識論卷三、一一頁下。
- (10) 注1と同じ。
- (11) 妙法蓮華経並びに開結、五六七頁、創価学会教学部編、聖教新聞社。
- (12) 妙法蓮華経並びに開結、五六八頁、創価学会教学部編、聖教新聞社。
- (13) 妙法蓮華経並びに開結、五六九頁、創価学会教学部編、聖教新聞社。
- (14) 日蓮大聖人御書全集、七六九頁。
- (15) 日蓮大聖人御書全集、七七〇頁。
- (16) 妙法蓮華経並びに開結、五六九頁、創価学会教学部編、聖教新聞社。
- (17) 『人類の知的遺産』ガンジー、森本達雄著、講談社。
- (18) 竹内啓二他訳『マハトマ・ガンディー、私にとつての宗教』（新評論、一九九一年）
- (19) 猪口邦子著『戦争と平和』（東京大学出版会、一九八九年）
- (20) 大正大蔵経卷三十五、探玄記卷一。
- (21) 聖教新聞、一九九一年一月二六日付。

（かわた よういち・研究所長）